令和5年8月26日

昭和女子大学　現代教育研究所
創立10周年記念講演会

これからの社会を心豊かに生きる子どもたちを育てる

ーVUCAな時代を生き抜く道徳力を育むー

武庫川女子大学　　押谷由夫

話の大筋

1．本講演は、現代教育研究所10周年記念も兼ねていますので、設立に関するお話を最初にさせていただきます

2．進められる学校改革の動向

2．学校改革をリードする道徳教育

3．これからの道徳教育、「特別の教科　道徳」の課題と対応

１　現代教育研究所10周年にあたり

１－１現代教育研究所設立の経緯

昭和女子大学教育研究充実のための３つの願い

１．4年制初等教育学科の設置

２．教育研究のための大学院の設置

３．教育研究所の設置

これらを一体的・継続的に取り組むことから出発しました。

１－２　共通の願い

（志を託した詩「新たな夜が明けようとしている」）

新たな夜が明けようとしている
昭和の教育の夜が
脈々と受け継がれた昭和の灯火が
いままた、教育の光りによって燃え上がろうとしている
積み上げられてきた人見イズムの石積みを
さらに高く積み上げんと志し
我らは誓う
昭和の教育のメッカたらんと

新たな夜が明けようとしている
昭和の教育の夜が
我が国の優れた教育文化の灯火が強風にさらされ揺れ動くとき

世の光りとなりつつ
一本の磐石の柱を建てんと志し
我らは挑む
日本の教育のメッカたらんと

新たな夜が明けようとしている
昭和の教育の夜が
子どもたちの幸せと平和な社会を築かんと
昭和に集いし夢追い人
視野を世界に広げつつ
理想の教育研究の場を志し
我らは夢見る
世界の教育のメッカたらんと

１－３　現代教育研究所への願い

・**今日的教育課題について、自由に研究・交流**ができる。
・研究の領域は、教育全般に及ぶが、**幼児教育機関、小学校、中学校、高等学校、義務教育学校、中等教育学校、特別支援学校を中心に、家庭や地域における教育も含めて**広く研究活動を行うことができる。
・研究交流は、**同じ興味関心をもつ身近な研究仲間**はもちろんのこと、志を同じくする**全国の研究・実践者、行政官、企業人等とも交流**を深めたい。また、**国内外の教育研究機関や大学等との交流**も図っていきたい。
・研究・交流の拠点として機能するようにスペースを確保し資料等を充実させるとともに、**教育課題に関する情報ターミナル基**地としての機能も果たせるようにしたい。
・**Think global, Act local**の精神で**学校現場や教育実践及びこれからの教育政策に役立つ研究**を推進していきたい。
・**学生も積極的にかかわれる**ようにしたい。
・**建学理念にかかわる研究**を継続発展させる。」

１－４　現在の研究プロジェクトの現状

コア・プロジェクト

・「先3（先生による先生のための先回り）」研修会
（電通　アクティブラーニングこんなのどうだろう研究所とのコラボ企画）

・「コクリ＝ Co-Creative Learning」（附属中高部、大学との連携）

各プロジェクト

・「私学教育研究プロジェクト」

・「英語教育研究プロジェクト」
（「絵本をつくろうプロジェクト」）

・「理科教育研究プロジェクト」
（「理科授業のヒントになる動画配信に向けた研究」）

・「プロジェクト研究（「表現教育による〈深い学び〉の検 証」）
（人形劇〈さくらの夢〉動画制作」）　　等

※　詳しくは現代教育研修所のホームページを参照のこと
https://content.swu.ac.jp/iome/

２　進められる学校改革の動向

２－１　改訂学習指導要領が特に求めていること

※　改訂に込められた思い（文科省　ホームページより）

学校で学んだことが，子供たちの「生きる力」となって，**明日に，そしてその先の人生につながってほしい。**これからの社会が，どんなに変化して予測困難な時代になっても，**自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，判断して行動し，それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。**そして，**明るい未来を，共に創っていきたい。**「学習指導要領」には、そうした願いが込められています。

○　何ができるようになるの？（資質・能力の三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）

・すべての学びが人間としてよりよく生きることへと方向づけられることが大切である

○　どのように学ぶの?（主体的・ 対話的で深い学び）

・深い学びとは、主体的で対話的な学びを通して自らの生き方（よりよい自己形成とよりよい社会づくり）に深く関わっていく学び

○　カリキュラム・マネジメント

・教科等横断型の学習、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）等

○　社会に開かれた教育課程

・地域の人々や専門家等の協力を得て、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る

２－２　Society.5.0社会の実現に向けた学校改革

Society5.0（超スマート社会）

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、**人間中心の社会。**

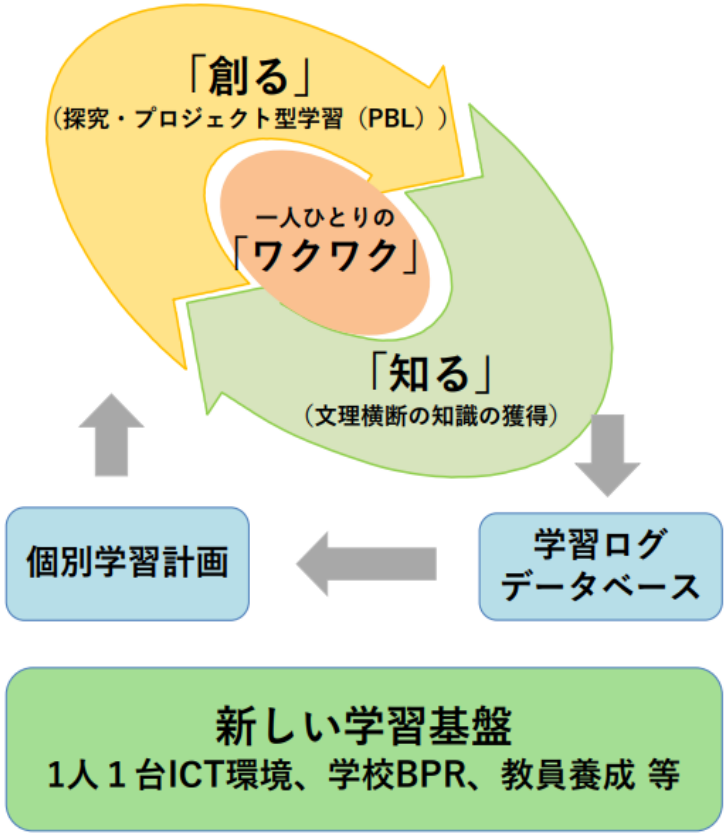
文科省の取組（GIGAスクール構想）

共通して求められる力として「**文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力**」を求めている（「Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会報告」平成30年6月5日）

「**GIGAスクール構想**」を立ち上げ、「**１人１台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備**することで、特別な支援 を必要とする子供を含め、**多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化さ れ、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する**」としている。

経済産業省による「未来の教室」実証事業

※経済産業省公表資料より



1．学びのSTEAM化
「創る」ために「知る」学びへの転換
（カリキュラム・マネジメント）

2．学びの個別最適化
一人ひとりが自分のペースを作る学びへ

１人１台パソコン環境
⇒教育EBPMの入口

★　文部科学省、経済産業省、デジタル庁等が一体となってGIGAスクール構想に基づく教育DX（デジタル・トランスフォーメーション）に取り組んでおり、一層加速される

政府は「GIGAスクール構想」を中心に、関係省庁を挙げて学校現場のデジタル環境を整備しています。

経済産業省では新しい学習指導要領のもとで、１人１台端末と様々なEdTech（エドテック）を活用した新しい学び方を実証する
「未来の教室」実証事業を、2018年度から全国の学校などと進めてきました。
このポータルサイトでは、「未来の教室」事業の取組状況・成果や、
EdTechやSTEAM等、学びの最新動向についての情報を提供しています。
学びを「ワクワク」させるヒントがたくさん掲載されています。 ぜひご活用ください！

未来の教室 実証事業成果報告書
22年度成果報告書が公開されました

未来のブカツ成果報告書
22年度成果報告書が公開されました

STEAM Library

STEAMライブラリー は、ワクワクを起点に「創る」と「知る」の循環的な学びを実現するためのオンライン図書館です。

EdTech ライブラリー

EdTechライブラリー では、「未来の教室」実証事業で活用した、学校でも活用できるEdTechサービスを紹介しています。

学校BPR
学校における働き方改革

学校における働き方改革 の実現に向け、BPRの手法を学校に応用し、現状分析や解決策の策定を行った調査結果をご紹介します。

未来の教室通信

「未来の教室」通信では、「未来の教室」実証事業等を紹介するニュースレター、実施したイベントの概要や事例紹介をご覧いただけます。

経産省ホームページ（https://www.learning-innovation.go.jp/）より

２－３　中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（2021.3.26）

★　日本型学校教育の特徴

〇知・徳・体の全人教育、〇全員への教育保障　等

★　2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

①　個別最適な学び

・指導の個別化
（特性や学習進度等に応じ，指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う）

・学習の個性化
（子供の興味・関心等に応じ，一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで，子供自身が学習が最適となるよう調整する）

②　協働的な学び

・探究的な学習や体験活動等を通じ，子供同士で，あるいは多様な他者と協働しながら，一人一人のよい点や可能性を生かすことで，異なる考え方が組み合わさり，よりよい学びを生み出す

※　個別最適な学びと協働的な学びを統合させる「**令和の日本型学校教育**」を提唱。

２－４　新たな教育振興基本計画
令和5年度～9年度　令和5年6月8日　閣議決定

★　次期計画のコンセプト

2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成

・**将来の予測が困難な時代**において、未来に向けて**自らが社会の創り手**となり、課題解決などを通じて、**持続可能な社会**を維持・発展させていく

・**社会課題の解決**を、経済成長と結び付けて**イノベーション**につなげる取組や、一人一人の**生産性向上等**による、**活力ある社会の実現**に向けて「**人への投資**」が必要

・**Society5.0**で活躍する、主体性、リーダーシップ、創造力、課題発見・解決力、論理的思考力、表現力、チームワークなどを備えた人材の育成

日本社会に根差したウェルビーイング（※）の向上

・**多様な個人**それぞれが**幸せや生きがい**を感じるとともに、**地域や社会**が**幸せや豊かさ**を感じられるものとなるための教育の在り方

・幸福感、**学校や地域でのつながり**、利他性、協働性、**自己肯定感**、自己実現等が含まれ、協調的要素と獲得的要素を調和的・一体的に育む

・**日本発の調和と協調**（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを発信

※身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。

★　今後の教育政策に関する基本的な方針

①グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成

- **主体的に社会の形成に参画**、持続的社会の発展に寄与
- **「主体的・対話的で深い学び」**の視点からの授業改善、大学教育の**質保証**
- 探究・STEAM教育、文理横断・文理融合教育等を推進
- グローバル化の中で**留学等国際交流**や大学等国際化、外国語教育の充実、SDGsの実現に貢献するESD等を推進
- **リカレント教育**を通じた高度人材育成

②誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進

- 子供が抱える困難が多様化・複雑化する中で、個別最適・協働的学びの一体的充実やインクルーシブ教育システムの推進による**多様な教育ニーズへの対応**
- 支援を必要とする子供の**長所・強みに着目**する視点の重視、**地域社会の国際化**への対応、**多様性、公平・公正、包摂性**（DE&I）ある**共生社会の実現**に向けた教育を推進
- **ICT等の活用**による学び・交流機会、アクセシビリティの向上

人生100年時代に**複線化する生涯**にわたって**学び続ける**学習者

③地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進

- **持続的な地域コミュニティの基盤形成**に向けて、**公民館等**の社会教育施設の機能強化や**社会教育人材**の養成と活躍機会の拡充
- **コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進**、家庭教育支援の充実による学校・家庭・地域の連携強化
- **生涯学習**を通じた自己実現、地域や社会への貢献等により、**当事者**として**地域社会の担い手**となる

④教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進

DXに至る３段階（電子化→最適化→新たな価値(DX)）において、第３段階を見据えた、**第１段階から第２段階への移行**の着実な推進

GIGAスクール構想、情報活用能力の育成、校務DXを通じた働き方改革、教師のICT活用指導力の向上等、DX人材の育成等を推進

教育データの標準化、基盤的ツールの開発・活用、**教育データの分析・利活用**の推進

デジタルの活用と併せてリアル（対面）活動も不可欠、学習場面等に応じた最適な組合せ

⑤計画の実効性確保のための基盤整備・対話

学校における働き方改革、**処遇改善**、**指導・運営体制の充実**の一体的推進、**ICT環境**の整備、経済状況等によらない学び確保

NPO・企業等多様な担い手との連携・協働、安全・安心で質の高い教育研究環境等の整備、児童生徒等の安全確保

各関係団体・関係者（子供を含む）との対話を通じた計画の策定等

２－５　OECD（Education2030project）からの「ラーニング・コンパス」（学びの羅針盤）の提唱

「個人のウェルビーイングと集団のウェルビーイング」に向けた「進化し続ける学びの枠組み」の提案

知識、スキル、態度と価値観が、より良い未来の創造 に向けた変革を起こすコンピテンシーとして重要（基盤）

①新たな価値を創造する力　②対立やジレンマに折り合いをつける力　③責任ある行動をとる力が大切

そのためには「見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り（Reflection）のAAR サイクル」を重視

※　エージェンシー（自分の未来を自分〈自分たち〉で創る力）の育成

「生徒エージェンシー（Student Agency）」

変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力

＋

「共同エージェンシー(Co-Agency)」

「仲間や教師、家族、そしてコミュニティに囲まれ、それらの人たちがウェルビーイングに向けて生徒と相互作用して生徒を導いていくこと

↓

★　個人と社会（集団）のウエルビーイングを目指して子どもたちが主体的に責任を持って行動できるようにする。そのことを共通目標として、教師が子どもたちと一緒に主体的に行動し学びの環境を創る

★　Education2030projectは日本がリードしている

Education2030projectの発端は、東日本大震災の直後にOECDのアンヘル・グリア事務総長の提案により、発足した「**OECD東北スクールプロジェクト**」にあるとされる。被災地の各地域から約100名の中高生が参加してもらい、復興とともに「新しい東北・日本の未来」を考え、実行する人材育成をPBLを用いて行われた。

OECDは、その成果を「**2030年に向けた新しい学校教育**」**のモデルとなるもの**と評価している。

この「OECD東北スクールプロジェクト」の取組や成果を踏まえて、OECDは新たなプロジェクトとしてEducation2030projectを開始した。

その中で、育成すべきコンピテンシーとして、「知識」「スキル」「態度及び価値観」が挙げられているが、「**態度及び価値観**」については、否定的意見も多かったが、日本がその重要性について主張し続けたことで、ヨーロッパ社会でのテロの頻発等もあり、支持されるようになった、と直接担当した白井氏は述べている。

（白井俊『OECDEducation2030プロジェクトが描く教育の未来』ミネルバ書房 2020）

２－６　2030年以降の社会をどう捉えるか

2030年の社会予測からの新たな変化

VUCA〈Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、
Ambiguity（曖昧性）〉（予測困難で不確実、複雑であいまい）な時代が加速

・世界的な新型コロナウイルス感染
・ロシアのウクライナ軍事侵攻、そのための世界的混乱（インフラも含めて）
・中国の台頭、東アジアの飛躍的成長（日本の低成長）
・チャットGPTの開発など生成AIの発達　　等

求められる対応

・突発的な世界的危機（混乱）や急激な世界の変化への対応（対策や解決への協働等）
・急激な技術革新への対応（再生エネルギー、食糧、医療、介護等）
・急激な社会構造や生活文化の変化への対応
（少子高齢化、５G、６G、共生等）
・共生と自立への対応
・AIの発達による活用と危険な活用への対応（自己開発と自己規律等）　　等

２－７　これからの教育で最も大切にすべきことは何か

1 教育は、一人一人の幸せな生活を基盤として、生涯に亘って幸福を追い求められる力を育むものである（個人と社会の幸せ）

2 そのために、一人一人の実態に応じた社会への対応を図る教育が必要である

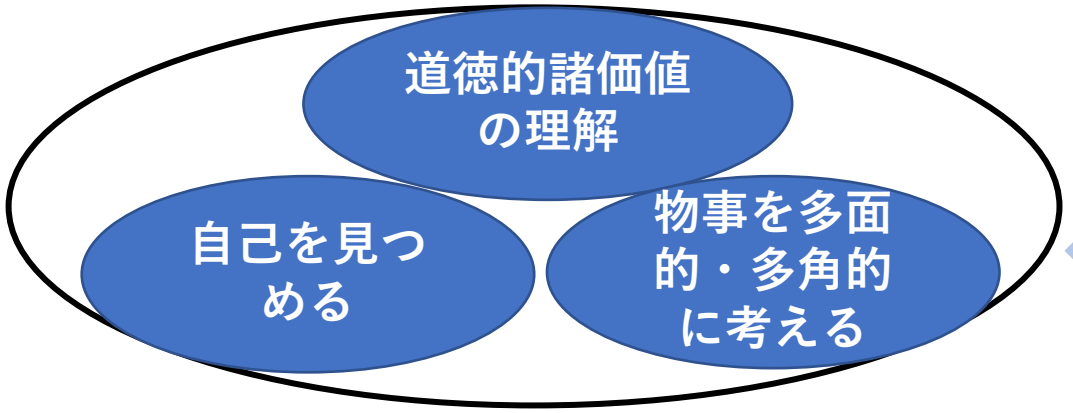
（社会への適応をもとにするのではなく、一人一人の幸福への道しるべとなるための社会的自立への教育であるべき）

3 新しい社会の創造は、多様性の共生（ダイバーシティ）の中でこそ可能である

道徳教育を根幹にすべき

３　学校改革をリードする道徳教育

３－１　道徳教育と「特別の教科　道徳」の目標



人間として
自分らしくどう生きるか

「特別の教科道徳」を要として

よりよい自分と社会を創っていく

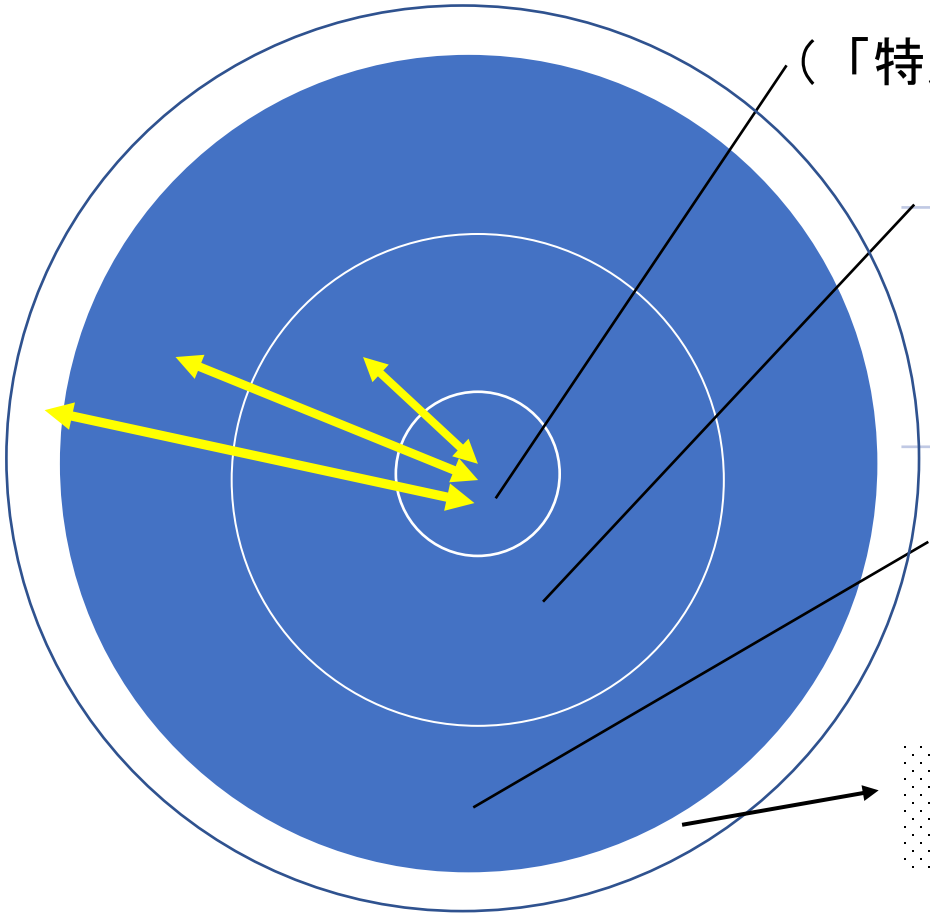
主体的に判断し行動する
（生活や学習の中で追い求める）

自律的に道徳的実践のできる子どもたちを育てる

※　道徳教育推進上の留意点

道徳教育を進めるに当たっては，**人間尊重の精神**と**生命に対する畏敬の念**を家庭，学校，その他社会における**具体的な生活の中に生かし**，**豊かな心**をもち，伝統と文化を尊重し，それらを育んできた我が国と郷土を愛し，**個性豊かな文化の創造**を図るとともに，**平和で民主的な国家及び社会の形成者**として，公共の精神を尊び，社会及び国家の発展に努め，他国を尊重し，**国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献**し**未来を拓く主体性のある日本人**の育成に資することとなるよう特に留意すること。

３－２　道徳教育の全体と「特別の教科　道徳」の関係



道徳的判断力、心情、意欲・態度

（「特別の教科　道徳」を中心に計画的・発展的に育成）

道徳的知識、方法

（各教科、特別活動、総合的な学習の時間等の特質に応じて育成）

道徳的実践（かかわりを豊かにすること）

（日常生活や様々な活動を通して育成）

道徳的環境
（道徳的風土）

３－３　道徳教育を充実させることで、人間観、指導観、評価観を教育本来のものにする

人間観

誰もがよりよく生きようとしている
（子どもへの信頼、リスペクト）

指導観

多様な主体的・対話的な学びを通して子ども自身が内なる力（よりよく生きる力）を伸ばしていくようにする

評価観

一人一人のよりよく生きる心や力の成長を評価する（自己評価・自己指導につなげる）

★　子どもを主体としたこれからの学校教育の原点が示されているととらえられる

４　これからの道徳教育、「特別の教科　道徳」の課題と対応

・これからのAIや科学が発達したVUCAな時代においては、人間存在そのものが問われることになる。つまり、「人間として自分らしくどう生きるか」が、最も大きな課題となる。

・その根本に「人間としての生命」を再検討する必要がある。ここではまず「生きんとするエネルギー」を活性化するという視点から考える。

・そのことを踏まえて、多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む方法について考えたい。

４－１　生命の教育の再検討

４－１－１　生物としての「生きんとするエネルギー」を活性化させる

４－１－１－１　内なるエネルギー衝動を表出させること

思いっきり体を動かす、声を出す

夢中になる

集中する　　等

４－１－１－２　身体や神経を休ませること

快眠

リラックス体験

肌のマッサージ

黙想　等

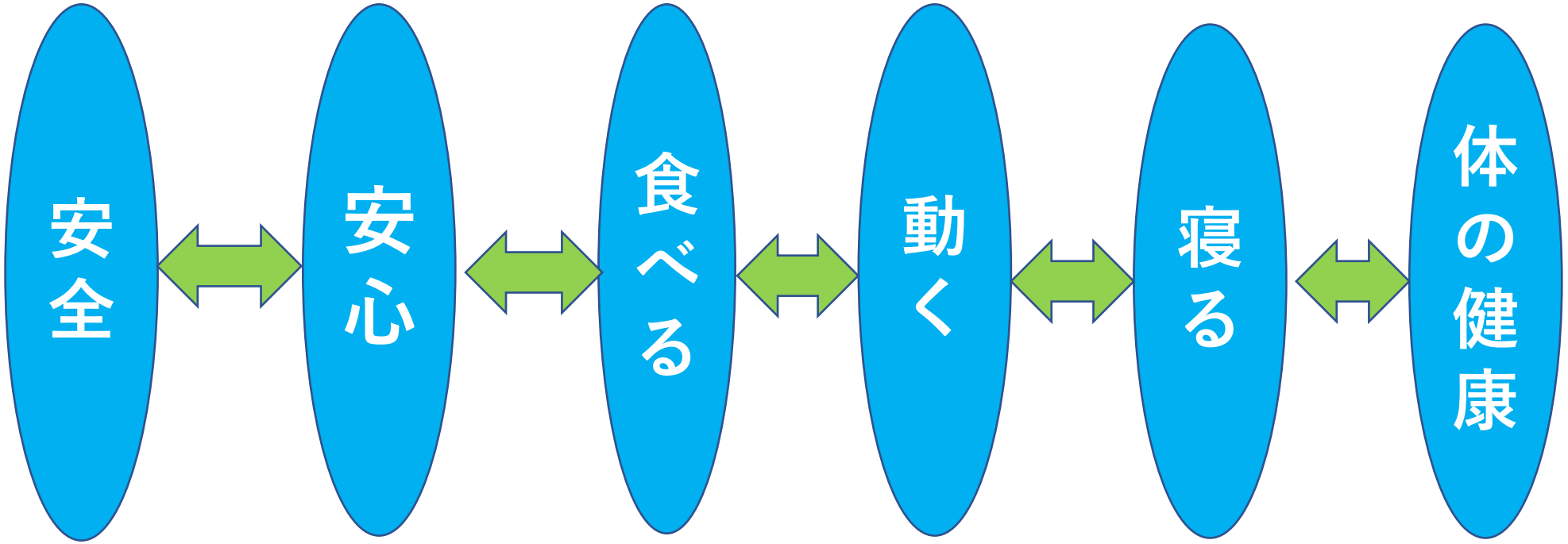
４－１－１－３　栄養を取ること

規則正しい食事

栄養のバランス

食事による体調管理
・健康管理　　等

４－１－１－４　生命力を高める生活習慣の確立



４－１－２　人間としての「生きんとするエネルギー」を活性化させる

４－１－２－１　感覚器官を研ぎ澄まし心地よさを感じること

感覚 → 感情 → 感性 → 情操 → 芸術文化（創造表現の表出）

- じっくりと触れる
- じっくりと見る
- じっくりと聞く
- じっくりと嗅ぐ
- じっくりと味わう

・価値あるものに感じる

・美意識

４－１－２－２　自然体験

全感覚器官で触れる

愛でる

育てる

一体感を味わう
（共に生きる）

４－１－２－３　崇高なものとの関わり

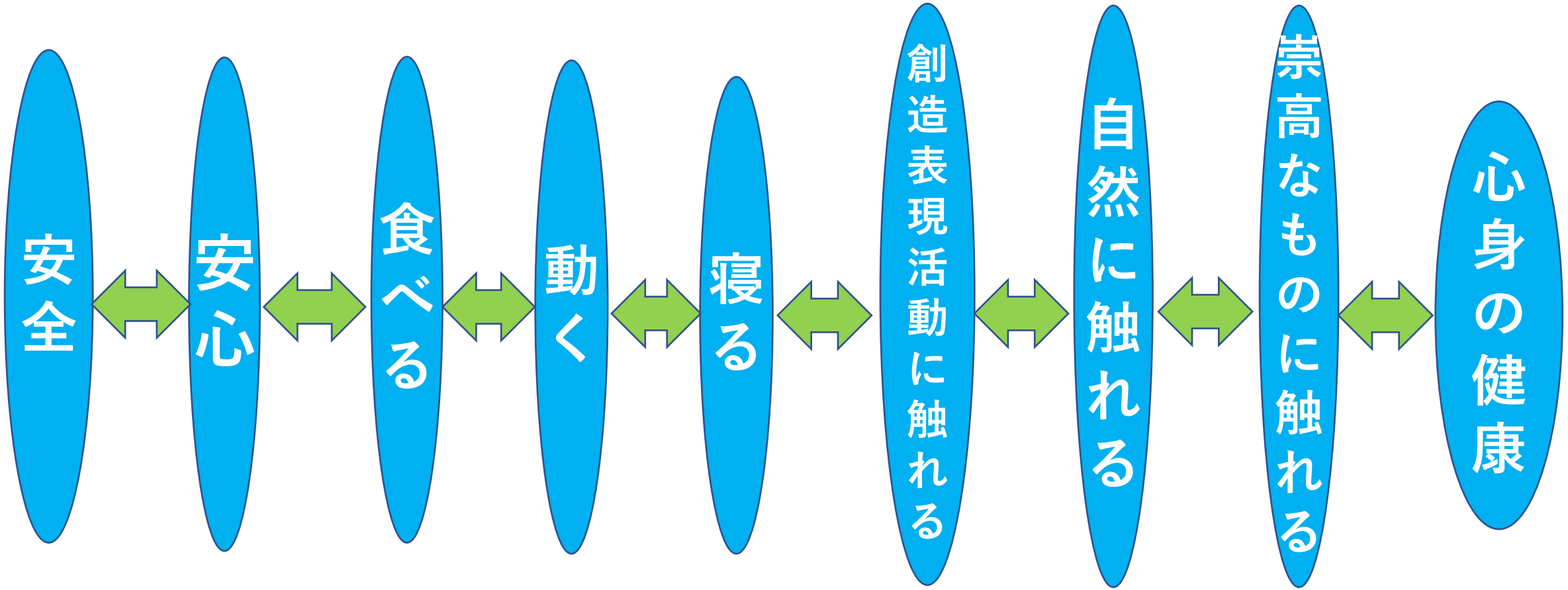
畏敬の念

敬虔な体験

神聖な場の自覚

祈り

４－１－２－４　人間としての生命力を高める生活習慣の確立



４－１－３　共生のための「生きんとするエネルギー」を活性化させる

４－１－３－１　生命への感謝の念を育む

受動的側面

1　与えられた生命

2　支えられて生きる生命

3　有限な生命

能動的側面

4　自分しか生きられない生命

5　支えて生きる生命

6　受け継がれる生命

感謝の心（報恩）

４－１－３－２　地域の生活での生命の交流を学ぶ

○　周りの生物は全部つながって生きている

○　地域の生活は人々がかかわることによって成り立っている

○　地域での生活には、多くの地域や外国の人々ともかかわりあっている

○　それらに感謝の念を高めて主体的にかかわる

４－１－３－３　人間が直面する課題に協働で考え取り組む

グローバル化した社会において人類が生きていくためには、共通課題を共有し、直面する課題に対応していくことが不可欠である。

そのためには

１）人間理解を深める

２）寛容・謙虚の精神を育てる

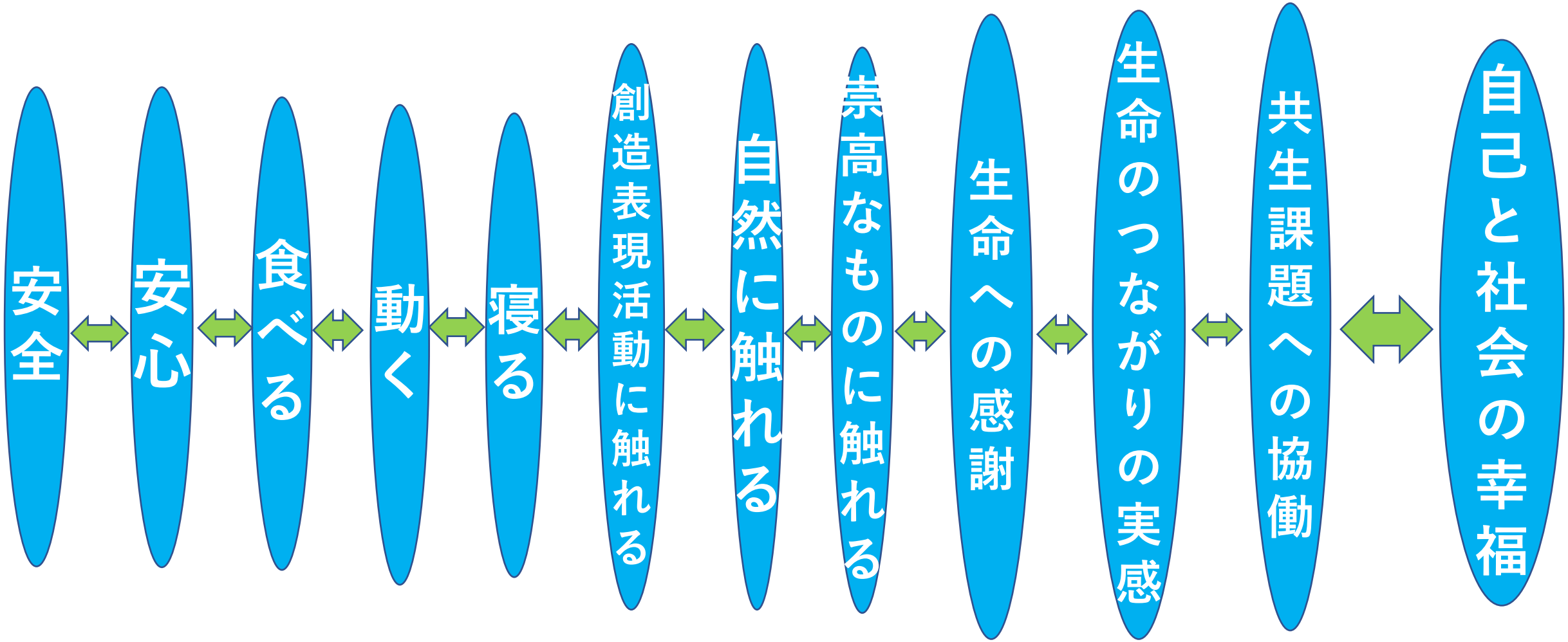
３）相手の立場に立って考える力を育てる

４）粘り強くかかわる力を育てる

５）協働して実践していく力を育てる

ことが大切である。生成AIとも協働しながら対応していくことが求められる。

４－１－３－４　共生のための人間としての生命力を高める生活習慣の確立



４－２　多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む

４－２－１　プロジェクト型道徳学習の推進

社会的課題等は子どもたちがこれからの社会をどう生き抜くかに関わる課題である。自らの生き方とかかわらせて追究することが大切であり、そのためには、「特別の教科　道徳」の学習を要として、実態を知る学習や調べる学習、実際に取り組む学習等をつないで課題を追究する学び（総合単元的な道徳学習）が必要。「特別の教科　道徳」を取り入れることによって、道徳性全体の発達とかかわらせて社会的課題等に関する学びを深めることができる。

ポイント

・できれば、具体的な創造表現物や行動目標を考え、それを人々に示したり実践することから効果を実感できるようにしたい（人に役立つ体験、人に喜んでもらえる体験を考える）
・計画段階から子どもたちも参画し取り組みながら柔軟に活動を発展させていったり修正したりする（適宜評価活動を入れる）。
・保護者や地域の人たちや専門家（ICT関係者も）の人たちにもかかわってもらうようにする。
・特に地域住民（高齢者家庭など）の情報格差（Digital Divide）への対応も取り入れたい。

４－２－１－１　各教科等における道徳教育の充実（各教科等の本来のあり方を追究すること）

- 各教科等は、教育基本法第5条の２で「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。」と明記されている。
- 新教育課程で育成すべき資質・能力の3つの柱として「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が明記され、各教科等の目標に、各教科等の特質に合わせてこの3つに関することが記されている。

※　各教科等の本来のあり方は、その学びがよりよい自己、よりよい社会の形成へと向かうことであるといえる。そのための道徳性を養うのが道徳教育である。

※「学びに向かう力、人間性等」についての評価

「学びに向かう力，人間性等」には，㋐主体的に学習に取り組む態度として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分と，㋑観点別学習状況の評価や評定にはなじまない部分がある。

学びに向かう力，人間性等

観点別学習状況の評価にはなじまない部分
（感性，思いやり等）
㋑

「主体的に学習に取り組む態度」として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分
㋐

個人内評価（児童生徒一人一人のよい点や可能性，進歩の状況について評価するもの）等を通じて見取る。

※ 特に「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性，進歩の状況などについては，積極的に評価し児童生徒に伝えることが重要。

知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で，自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価する。

＜参考＞報告P．8～9　改善等通知2．（1）

※　文科省　説明資料より

★　現在の学習指導要領の大きな課題

・各教科等の目標は、3つの資質・能力の柱に即して記されているが、「学びに向かう力、人間性等」については、興味関心、意欲、態度レベルで終わっている。
・各教科等の内容においては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」に関することのみが記されている（「学びに向かう力、人間性等」は明記されていない）。

↓

・「学びに向かう力、人間性等」を各単元等の学びの中に位置付けることが大切
・そのことによって、各教科等の特質に応じた、道徳的判断に必要な知識や道徳的実践へとつながる技能等やその応用に関する思考力、判断力、表現力等も育まれる。
・そのこととかかわらせて道徳の授業が行われることによって、より深い学び（よりよい自分とよりよい社会の形成に向けた）ができる。

※　各教科等の学びと道徳の授業が響き合っていくことが大切
（各教科等にとっても道徳の授業にとってもより深い学びができる）

４－２－１－２　環境の整備と道徳の授業を要にする基本

・地域、国内外の様々な社会的実態や課題に気づき、関心を持ち、考え、対応を考える機会を計画的に設ける必要がある。小・中に**情報科**を新設することも考えられる。
・廊下に世界地図、日本地図、県地図、市地図、地域地図を掲示し、その横に1週間ごとに新しい情報を子どもたちが分担して更新していく取り組みも行いたい。
・各教室には「道徳コーナー」を設けてその週の道徳の授業で取り上げた教材や補助資料、話し合ったことなどを掲示して継続的に考えられるようにしたい。

（授業の前の学び）

・日常生活での課題や地域課題、社会や生活の変化や課題に関する学習
・実態を学んだり考えたりして理解する教科等の特質に応じた学習　等

（道徳の授業での学び）

社会の変化、社会的課題等を人間としてどう生きるかという側面から考え自分（自分たち）の生き方の自覚へ（情報へのかかわり方や自己規律の確立も含めて）

（授業後の学び）

自分（自分たち）にできることを実践する。
さらに実態を調査し理解を深めながら自分（自分たち）の生き方を考え実践へとつなげていく。　等

４－３　道徳の授業における多様性を受容し、共生のあり方を考える学習の工夫

- 様々な道徳的状況や課題に対して、それぞれの感じ方や考え方などを出し合いながらより多様に考え、話し合い、共通理解を図りながら、どうすればいいのかを判断し行動やさらなる思考へとつなげていく指導過程が求められる。
- 特に課題となるのは、いかに多様な意見を引き出すかと、多様な意見をどのように整理するのか、またどのように自己を見つめこれからのことを考えられるようにするのか、が考えられる。
- 道徳の授業では、どの授業においても、目指すべき目標は、「よりよい自己の形成とよりよい社会の形成」である。その目標を共有する（確認する）ことによって、多様性を受容でき議論を深めることができる。
- 特に大切なのは寛容の心を育むことである。

４－３－１　道徳の授業で子どもたちに育んでほしい信念

○　自分は必ずよくなる（自分を信頼）

○　だれもがよりよく生きようとしている
（先生や友達を信頼）

○　みんなと一緒によりよい集団や社会をつくっていける
自分もみんなも成長できる（未来に対する絶対的信頼）

★　以上の信念につながる**想像力（イメージする力）**や**構想力（創造する力）**を育むことが大切。それは、**わくわく感、期待感**をもてる授業にすることでもある。

４－３－２　道徳的学びを通して想像力（イメージする力）と構想力（創造する力）をはぐくむことが大切

道徳的課題や場面に対して、道徳的価値意識とかかわらせて

・感じる力（気づく力）
・考える力
・判断する力
・意欲づける力

→

道徳的価値とかかわらせた想像力（イメージする力）・構想力（創造する力）

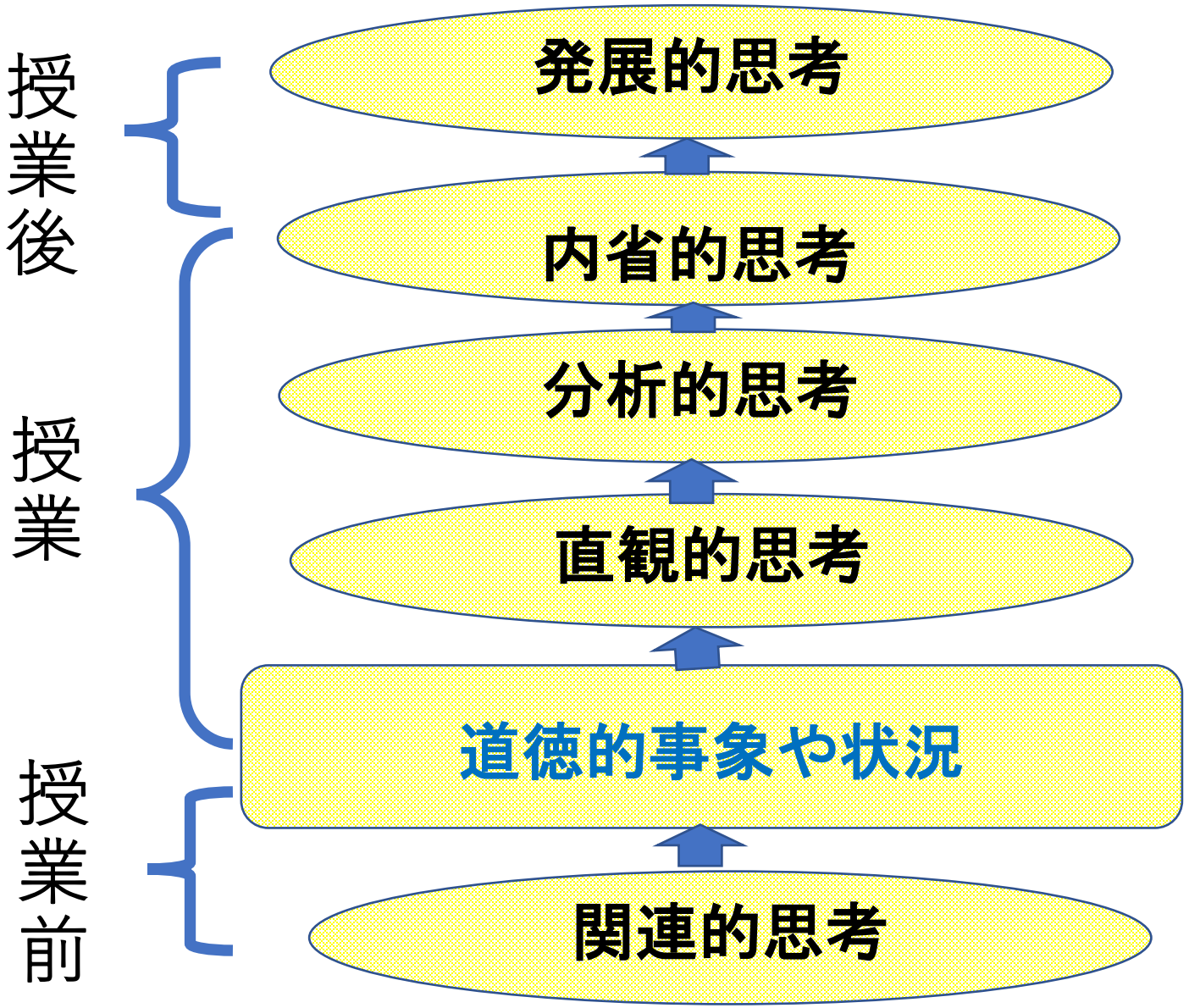
→

・自己
・人（他者）
・集団や社会
・生命、自然や崇高なもの

とのかかわりを深めてよりよい自己と社会を追い求める（実践する力）

道徳の授業の深まり　　事後の実践する力へとつなげる

４－３－３　道徳の授業における基本的思考の流れ



４－３－３－１　分析的思考（多面的・多角的に考える）
（道徳的価値の理解を深めることは様々な視点から考えることと関係する）

１　思考軸を移動させる

・対象軸（立場を変えて考える）
・時間軸（時間を移動させて考える）
・条件軸（条件を変えて考える）
・本質軸（どうして,そもそもを考える）

２　思考形態を変える

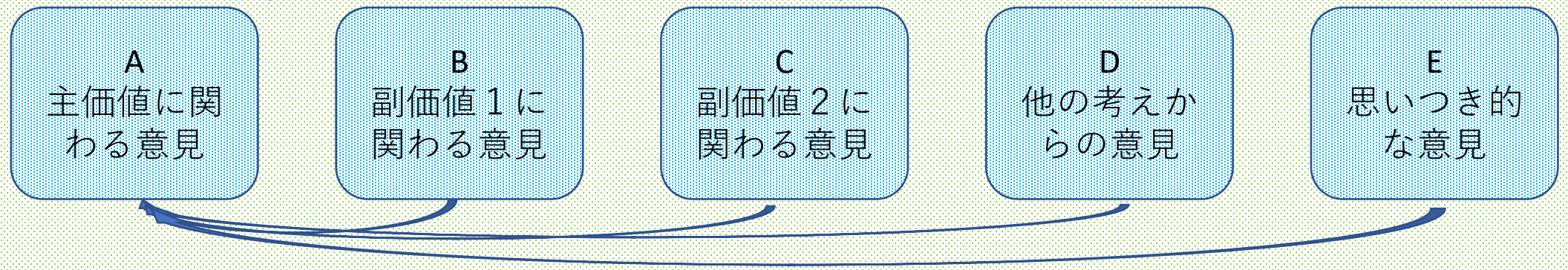
・疑問的思考
・批判的・論理的思考
・ケア的・心情的思考
・創造的・発展的思考

３　思考ツール
（思考を促すための手立て）

・問題や課題の図式化
・心情曲線
・心の綱引き
・天秤棒
・線上での位置
・階段図
・ウェブ図
・4象限図
・分割図
・Y字図
・鏡餅図
・水に浮く氷図
・ランキング
・グルーピング
等

４－３－３－２　出された意見を整理する

★　出された意見を子どもたちの意見を基に整理することが大切



・まとめると考えると本時のねらいを強調することになりがち
・まとめるのではなく、どのような意見が出ているかを整理することが大切
・そのことで全員の意見が尊重される
・そこには副価値的なもの等があるはず。それらを主価値（本時のねらいとかかわる道徳的価値）との関連でとらえられるようにもっていく
・そのことによって主価値の理解を深めるし、より自分の生活とかかわらせてとらえられる

４－３－３－３　内省的思考
（「私」と「私たち」を見つめる）

道徳的価値に照らして

私

・今までの自分（自分たち）
・今の自分（自分たち）
・これからの自分（自分たち）

私たち

自己課題・我々課題を明確化

４－３－３－４　自己評価、集団評価、教師評価の工夫

※　子どもたちのよりよく生きようとする心に関する　「よいところ探し」（課題を克服するためのよいところ探しを含む）が「特別の教科　道徳」の評価である

子どもたちの自己評価

（今日の授業でどのようなことを学んだか、今まで考えていたことから発展があったか、自分の課題を見つけることができたか、自分に対する発見があったか、他者に対する発見があったか等を押さえたい）

子どもたちの集団評価（学級の状態）

（みんなの意見が出されていたか。こういうこともあったらよかったと思うことはあったか。みんなと共通理解できたこととしてどのようなことがあったか。みんなで取り組む課題を見つけることができたか等を押さえたい。）

教師評価（教師による個人と全体に対する見取り）

（一人一人の成長と課題、学級の成長と課題の把握）

（一人一人のよさを見取る観点、学級の成長を見取る観点等の開発　等）

４－３－３－５　事後につなげていく工夫

- 掲示
- 道徳ノート
- 朝の会や帰りの会（道徳タイム）
- 総合単元的道徳学習（プロジェクト型道徳学習）　等

※　道徳の授業は教師にとって子どもたちの実態把握の時間でもある。気になったことや取り上げられなかった意見等について事後に聞くということも大切（個別指導へとつなぐ）

※　学級全体に注意を向けることや計画的に授業での学びを発展させる取り組みを考えることも大切（日常生活や様々な教育活動につなぐ）

４－３－３－６　道徳的学びに関するノートの工夫

自らの道徳的学びを、記録し、評価し、設計する
（自分の財産、生涯の心の支えにしていく）

- 目標を明確にする（近き目標と遠き目標）
- 学びの積み重ね（記録する）
- 授業と日常生活等とつなぐ
- 見返す（リフレクション）
- 自己評価し、課題を見出し、取り組めるように計画する　等

発達段階に応じたノート指導が大切
ICTの活用を積極的に考えたい

４－３－４　価値観多様化時代において いかに寛容の心を育てるか

（憎しみを乗り越える力の育成が大切）

憎しみからは何も生まれない
（憎しみを繰り返していくだけ）
憎しみを乗り越える力をどう育てるか

・違いと同時に共通の課題（目標）を見出す
・共通の課題（目標）に対して一緒に追い求める
・そのための知恵を道徳の授業で学び、日常生活や様々な学習活動の中に生かしていく

（腹の立つ、許せない相手に対して相手の立場に立って考えることは簡単にはできない。しかし、同じ人間である、一緒に生きていかなければならないと考えた時どうすればいいのかを協働でしっかり考えられるのではないか）

※　社会的交換理論の応用

- アメリカの社会学会会長でもあったG.C.Homansは、次のような社会的交換理論を提唱している。

  簡単に言えば、人は利益のある行動をとる、というものである。

  Profit（利益）＝Reward（報酬）－Cost（費用）

この理論を応用するならば、様々な道徳的事象や状況において、何をReward（報酬）と考え、何をCost（費用）と考えるかを考え、道徳的な行為をProfit（利益）のある行動としてとらえられるようにするという視点からのアプローチも可能ではないか

★　RewardとCostを精神的、物理的、身体的な側面からとらえる

何を大きな報酬ととらえられるようにするか

・道徳的価値を身につけること（人間として成長すること）

・相手が喜ぶことをすること

・社会に役立つことをすること

これらのことに、喜びを感じる（報酬）ことが、そのためのCost（費用）、例えば、時間がとられる、相手に関わるのが面倒だ、身体が疲れる、お金がかかるなどよりProfit（利益）があると捉えられるようになることが大切。

そのためには、道徳の授業と学級の風土（生活を通してProfitを実感できる）が大切

○　竹田ダニエル『世界と私のA to Z』講談社2022より

竹田ダニエル氏は、1997年カリフォルニア生まれ。あらゆるメディアに抜擢されているZ世代の新星ライター。

- 「Z世代」とは、一般的には1990年代後半から2010年ごろまでの間に生まれた世代のことを指す。
- 私はそもそも「Z世代」というのは生まれた年月で区切られるものではなく、「社会に対して目を向け、常に自分と向き合い、だれもがより良い社会を目指すべきだという”価値観“」で形成される「選択可能」なものではないかと考えている。
- 「Z世代的価値観」とは、膨大な情報量と「繋がり」を駆使する能力を持ち、自分たちの世代で物事を変えていこうとする当事者意識を持ったことによって生まれた新しい価値観である。今まで分断を引き起こしていた壁を崩壊させ、多様で新しい価値観に誰もがアクセスできる中で、目まぐるしく変化する社会に抵抗するのではなく、前向きに学び合い、受け入れることを可能にする。

道徳教育（VUCAな時代を人間として自分らしくよりよく生きる）がこれからの教育改革の先導役を果たせるようにしよう

（その要として「特別の教科　道徳」がある）

学校を真の豊かな人間教育の場にしよう